

## — ( 研 究 ) —

男 性 乳 癌 の 1 例  
— 細胞像を中心に —武蔵野赤十字病院 検査部<sup>1)</sup> 病理部<sup>2)</sup> 外科<sup>3)</sup>宅見 智 晴<sup>1)</sup> 清水 恵子<sup>1)</sup> 大久保 照光<sup>1)</sup>山下 茂 郎<sup>1)</sup> 永塚 真由美<sup>1)</sup> 目黒 純 一<sup>1)</sup>齋藤 生 朗<sup>2)</sup> 瀧 和 博<sup>1)2)</sup> 松木 盛行<sup>3)</sup>嘉和 知靖之<sup>3)</sup>

## 【 は じ め に 】

男性乳癌は、高齢者に多く全乳癌の約1%を占め内8割が浸潤性乳癌とされている。今回我々は乳頭分泌物を契機に発見された男性乳癌を経験したので細胞像を中心に報告する。

## 【 症 例 】

患 者：80歳男性

現病歴：2年程前より血性分泌物が出現。1年後に近医を受診。分泌物細胞診にてClass Iであったが精査を勧められ当院外科を紹介された。

## 【 超 音 波 検 査 】

超音波検査では左CDEエリアに1.03cm大



写真1 赤血球背景に結合性の強い乳頭状集塊が認められる。

の縦／横比のやや大きい形状不整、境界明瞭、辺縁は側面を中心に粗雑な所見を認めた。

## 【 胸 部 C T 】

胸部CTでは、左径2.6cmの軟部影があり胸壁浸潤は認められなかった。

## 【 細 胞 所 見 】

赤血球背景に好中球、組織球、乳管上皮由来の乳頭状集塊を認めた(写真1)。集塊はやや不整であるが明らかな核の突出は認められない。細胞の重積性を軽度認め、核は小型でクロマチンは顆粒状で増量傾向を示し、小型な核小体も認められた。はっきりとした筋上皮細胞との二細胞性は認められない(写真2)。結合性の強い乳頭状集塊で、やや集塊

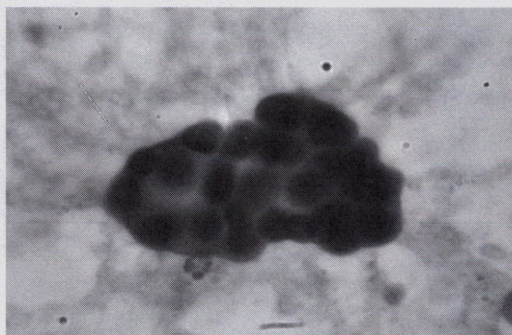


写真2 核の大小不同を軽度にも認めるも、集塊辺縁は比較的スムーズに保たれている。



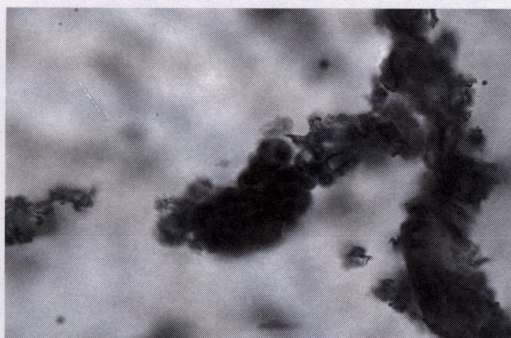


写真3 結合性の強い集塊でやや辺縁に不整を認める。

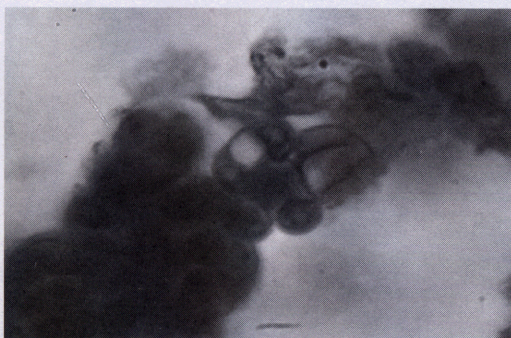


写真4 対細胞様細胞が認められる。

の辺縁に不整が認められた(写真3)。中央に対細胞様細胞を認め増殖が著しいことが示唆された(写真4)。

標本中には、結合性の強い乳頭状集塊で孤立細胞は認められず、出現細胞が少なかったことから、乳管内乳頭腫との鑑別が難しくClass IIIと診断した。

### 【病理学的肉眼及び組織所見】

切除生検材料：直径1.2cm大の乳腺腫瘍摘出材料。剖面は黄色調を帯びた灰白色調を示す。

胞巣状ないし索状配列を示す癌巣が、周囲間質への浸潤性増殖と間質結合組織の増生を伴う所見を認めた(写真5)。

手術材料：乳腺内には腫瘍切除に伴う血腫の形成を認めた。その血腫の周囲に切除生検と同様の胞巣状ないし索状配列を示す硬癌細胞

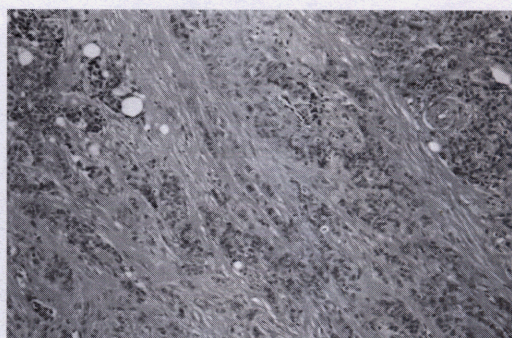


写真5 間質への浸潤性増殖と間質結合組織の増生が見られる。

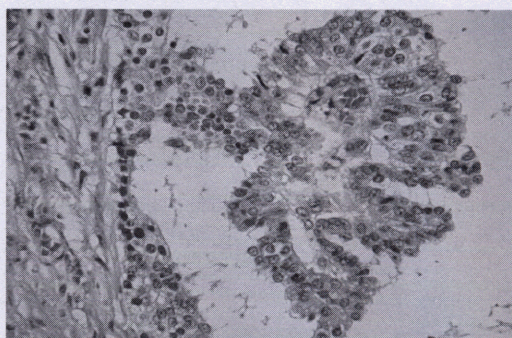


写真6 乳頭近傍に乳頭腺管状増殖を認める。

を認めた。乳頭近傍の乳管内には、乳頭腺管状増殖も認められた(写真6)。

### 【考 察】

男性の乳腺腫瘍は女性化乳房が大部分を占め乳癌はまれである。本症例では左CDEエリアの腫瘍と血性分泌物が主訴であった。乳腺分泌物細胞診では、疑陽性と診断された。乳腺分泌物については、以前より種々の検討がされているが<sup>1)~3)</sup>、得られる細胞量が少なく、細胞がすでに変性に陥っていることも多く、また検体採取時の乾燥、標本からの細胞の剥離などにより疑陽性や誤陰性と診断される症例が多い<sup>4)</sup>。診断上、特に問題となるのは個々の細胞異型に乏しい乳頭状または篩状構造を示す乳癌と良性乳頭状病変の鑑別である<sup>5)</sup>。藤井ら<sup>6)</sup>は、良性乳頭状病変では①乳管上皮細胞は中型から小型の乳頭状集塊として



出現することが多く、結合性は強く集塊からの細胞の逸脱像は見られない、②集塊の最外層は細胞質で包まれて核が辺縁から外方向に突出する所見はほとんど見られない、③対細胞は悪性例に比べると頻度、数共に少ないと報告している。和田ら<sup>7)</sup>は、男性乳管内乳頭腫は、術前穿刺吸引細胞診のみで良性と診断するのは困難で、組織像は女性の乳頭腫と同様で、腫瘍は明瞭な二細胞性を有する乳頭状増殖を示すと報告している。本症例を再検討すると血性背景に結合性の強い小型の乳頭状集塊が少数認められた。この集塊の中に、細胞配列の不整や最外層に細胞質がほとんど見られず細胞重積性の強い部分、弱い部分が認められなど、良性乳頭状病変ではあまり見られないような所見が認められた。細胞診断にあたっては、臨床情報や画像所見も重要であることを再認識した。

### 【 ま と め 】

細胞個々の所見と集塊の構築を細かく観察し、総合的に診断することが重要であることを再度認識することができた症例であった。

### 【 文 献 】

- 1) 森 武貞他：無腫瘍性乳癌の診断。臨床科学、25(12)：1563～1567
- 2) 松田 実他：異常乳頭分泌物の細胞診断。日臨細胞誌、8(1)：31～39, 1969
- 3) 藤井 雅彦他：乳癌の組織形態と分泌物細胞像との関連について。日臨細胞誌、30(4)：677～682, 1991
- 4) 石井 保吉他：蓄乳法による細胞検査の意義—その陽性率について—。日臨細胞誌、26(6)：958～962, 1987
- 5) 石井 保吉他：蓄乳法による乳頭分泌物細胞診—乳管内乳頭腫と乳癌の鑑別点について—。日臨細胞誌、28(6)：830～834, 1989
- 6) 藤井 雅彦他：乳頭分泌物の細胞学的意義。病理と臨床10(8)：877～880, 1992
- 7) 和田 徳昭他：男性乳管内乳頭腫の1例、乳癌の臨床13(1)：219～222, 1998